

1月27日の1月例会は、コロナ罹患のため欠席でした。2か月ぶりです。

1月20日～21日の「親子孫講座『磁石』上田」、2月11日～12日の「親子孫講座『磁石』中野」は、受講者は少なかったものの、たのしく助手ができました。(1月28日の大道仮説「びりりん」上田は欠席。)

また、2月18日AM上田市中央公民館文化創造祭において、上田仮説サークルによる「折り染め体験」は十数名の参加により、盛大(?)に体験講座が行われました。以前、科学講座においでた親子も来てくれて、嬉しく思いました。

あと、3月3日の大道仮説「びりりん」中野、3月9日のまちかど科学クラブ最終回(渡邊先生、9年間に亘って講師お務め、ありがとうございました!引き継げずすみません)と続きます。

子どもたちとの生活もあと少し。この前、講座売り場で自前で買った110円の安いおもちゃ類(へびごま、ふきごま、日光に当てると色が変わる花、飛び出す編み棒)や、(たのしい授業2月号に載っていた)マジック「異次元のロープ」を持って行って教室でやったら、子どもたちはその後しばらく楽しんでやっていました。

年度末で、通知表や指導要録、個別の指導計画、個別の教育支援計画、引き継ぎ資料づくり、などなど、やるべきことがいっぱいありますが、何とかせねば、です。

さて、今回もまたまた、紹介ばかりのレポートで、すみません。

- ① 『内外教育』2023年7月21日号より、子供のための授業づくり第28回「ティーチャープルーフ・カリキュラム」(奈須正裕・上智大教授)で、仮説実験授業とキミ子方式が紹介されていました。

奈須先生は、いま信濃教育会教育研究所の特任所員も務められている教育学者で、たしか国立教育研究所にもいたことがあります。なので、板倉先生のことも知っているはず。『内外教育』は、教育総合情報誌(たしか隔週ごと刊行)で、管理職や教育行政職もそれなりに購読しているようです。私としては(購読すると高いので)長野大学でたまにみていて、偶然にこのシリーズと記事を見つけましたので、コピーして紹介します。(ついでに板倉先生が国研にいた時の所長(菱村幸彦氏)の記事も載せます。)

この文章では仮説実験授業やキミ子方式について、いい面を認めつつ、やや批判的に書かれています。そしてこの話は、ちょうど『たのしい授業』2024年2月号の、黒田康夫さんによる「授業のやりがいとはなにか ～仮説実験授業は教師を失業させるか～」という論文にもつながる内容だと思います。

黒田さんは、『仮説実験授業資料叢書1(復刻版)仮説実験授業いま・むかし』(伊藤篤子編著・2009年50年史編纂室、重弘忠晴)に記録されている板倉先生の論考を参考に、話をすすめています。

そこに「仮説実験授業は教師と失業させるか ～山住正己氏の指摘をめぐって～」が引用されていて、特に、なるほどとうなずいたところが、以下の部分です。

たとえば科学教育の内容に関していえば、「授業書」があっても、いや、あるからこそ、教師は科学の論理と科学的認識の成立過程について深い深い理解を持つよう勉強しなければならないはずである。そのためには、科学史の本や科学者の伝記や科学の古典を読み、すぐれた科学啓蒙書を読むことも大切であるが、何よりも子どもたち自身から学ばねばならないであろう。私には、「仮説実験授業を1年間受けた子どもの優秀な部分に匹敵するような科学論・認識論を体得している教師は、いまのところほとんど皆無」といってよいようにさえ思われるのである。

しかし、技術化された新しい授業における教師の役割を定式化することは、これからの問題である。多くの人々の協力で、これが解決されることをのぞみたい。

そして、私の感想として、「教師は自力で苦勞して、子どもに合ったオーダーメイドな教材や授業をつくるべきであり、それを他力に委ねるのはよくない」という考え方がいまでも教育界にあると思います。戦後初期からの生活単元・問題解決学習も、極々優秀な教師たちにより脈々と実践されています。伊那小学校の教育研究はいまでも数々批判を受けながらも続けて来ていて、全国的に有名です。やはり、子どもを理解しようとしたり子どもから学ぼうとしたり、熱心に教育に取り組もうとする教師のあり方が必要です。まえ牧衷さんの話で「板倉さんは初め、仮説実験授業は誰でもできます、と言ったが、訂正し、熱心な教師ならば仮説実験授業は誰でもできます、とした」という言葉が耳に残っています。ICTなど急速に進化していますが、教師のあり方として不易なものがあると言えます。

それにしても事務仕事が多い！！これを先延ばしして遅れてしまいがちな相変わらずの私です。

② 通信制高校が、いますごく躍進しているらしい。

テレビ東京「カンブリア宮殿」（村上龍が司会）2023年11月16日に放映された、「十人十色の武器を育てる。通信制高校 教育革命の全貌」でN高校長、奥平博一(おくひらひろかず)という人が紹介されていました。長野県では土曜日午後（日経スペシャル）「ガイアの夜明け」や、「アド街ック天国」が数週間遅れて放映されますが、「カンブリア宮殿」は見られないのかな？私は「テレ東BIZ」というネット配信（月額550円）で、たまにチェックしていて、この前この番組がおもしろかったので、紹介します。ネットで検索したら、ダイジェスト版（13分くらい）があり、誰でも見られます。通信制高校は、いままで自分は「不登校生徒の受け皿」というくらいにとらえていましたが、このN高は、生徒数日本一！！一流大学に大勢、生徒を送り出しています。ICTを活用して内容的にも方法的にもレベルの高い授業を実現しています。また、体験的学習を取り入れている（五島列島での宿泊学習など）ところも、すごいなあと思います。

これもたまたまネットで「楽天マガジン」を見ていて、週刊誌「サンデー毎日」2024年2月11日号に、「通信制高校の、大学受験の底力」という記事があったので、スクショしてコピーして紹介します。そういえば、上田にも「クラーク国際高」「さくら国際高」があり、佐久には「地球環境高」があります。他にも、仮説実験授業研究会関連では「ルネッサンス高」があったり、特別支援教育関連で「星槎高校・大学」があったりして、それぞれ成果を挙げている模様です。

じつは東御市にも「ID学園高校」という、居酒屋・和民をはじめワタミグループ創業者の渡邊美樹氏が校長である通信制高校があります。湯ノ丸高原に行く途中に校舎があるのですが、地元との交流は特になく、どういう教育をしているのか実際に見に行けていません。

ところで、増田伸夫先生が、さくら国際高校のサテライトキャンパスで授業をされてきています。ぜひ、通信制高校という教育現場の様子をお聞かせください。【今日は以上です。】



北海道に本校（左）があるクラーク国際高校。昨夏は甲子園初勝利を挙げた。



中四国に本校（右）があるN高校。スポーツでは強豪として知られる。



通信制高校の大学受験の「底力」

全日制高校の「受け皿」のように見られてきた通信制高校が大きく様変わりしている。一芸に秀でた子どもたちが数多く通う場となっている。それだけではない。大学進学率も上昇し、難関大などへの合格者も多数輩出しているという。何が変わってきたのか。

ジャーナリスト・山田厚俊

通信制高校の歴史は古く、1947年、学校教育法制定により「高等学校は、通信による教育を行うことができる」と規定された。しかし、この時点では授業は国語1教科のみで始められた。授業の実施科目は順次拡大していったものの、限定されていた。

高校卒業資格が得られるようになったのは、55年の「高等学校通信教育の実施科目の拡充ならびに同通信教育による卒業について」という文部省（現・文部科学省）の事務次官通達によってである。

さらに、61年の学校教育法改正によって通信制課程の制度化、通信制独立校・広域通信制高校の制度化などが行われた。要は、全日制の公立高校の一部に組み込まれていた通信制が単独で開校できるようになったり、生徒を地域限定ではなく全国各地から入学できるようにする仕組みを採用するようになったりしたのだ。

通信を利用して授業を受け、週に何日か登校する。面談や対面授業、レポートの提出などで単位を取得し、卒業するという形だ。

通信制高校に詳しく、「通信制高校のすべて―いつでも、どこでも、だ

れでも」の学校」（彩流社）などの著書がある星槎大の手島純教授は語る。

「元々は勤労青少年が働きながら学び、高卒資格が取得できるような仕組みとして出来上がりました。55年がはじめの一歩とするなら、大きな節目となるのは88年の学校教育法改正です」

全日制高校と比べ授業日数が少ないことから、それまで通信制高校は定時制高校とともに修業年数が「4年以上」と定められていた。それを「3年以上」に短縮し、全日制高校と変わらない3年で卒業可能となったのである。

「全日制と同じ年数で卒業できるようにしたこと、教育の場が一気に広がり、私立の広域通信制高校が参入しやすくなりました」（手島教授）

広域通信制高校とは、本校以外に全国にいくつもの分校（拠点）を設け、本校

やまだ・あつとし 1961年、栃木県生まれ。建設業界紙記者、タウン紙記者を経て、95年黒田ジャーナル入社。阪神・淡路大震災取材に従事。主宰する黒田清氏逝去後、大谷昭宏事務所に転籍。2009年からフリー

とは離れた場所に住んでいても、入学できるシステムである。92年に開校したクランク記念国際高校(本校・北海道)もその一つ。同校教務進路部次長の阿部賢太氏はこう語る。

「全日制高校の受け皿機能と見られがちだった通信制高校から、生徒一人ひとりに合った多様性の教育を目指すため開学しました」

88年の法改正が大きく背中を押した形と述べている。さらに次の波が到来する。2003年に行わ

私立通信制高は年々増加の一途

これを機に、通信制高校は増加に拍車がかかった。文科省の「令和の日本型学校教育」の実現に向けた通信制高等学校の在り方に関する調査研究協力者会議」の参考資料集(2021年12月24日、以下「資料集」)によると、「広域通信

制」の高等学校学習指導要領の改訂」と「構造改革特別区域法改正」である。

「指導要領の改訂は、「放送による指導」とされているものに、「その他の多様なメディアを利用した指導」が追加されました。つまり、インターネットの活用が認められたのです。また、構造改革特区は、小泉純一郎首相(当時)が大ナタをふるった構造改革の一環で、通信制高校にも株式会社への参入が可能となったのです(手島教授)

制高校の学校数については、1998年以降、急激に増加。98年からの10年間で66校増加し、2008年からの10年間で32校増加している」という。03年の法改正以降、その傾向は顕著で、04年は私立が7校、株式会社立が1校新設され、

その後も私立が毎年のように新設されている。

当然のことながら、生徒数も通信制高校はうなぎ登りだ。資料集によると、全日制および定時制の生徒数は1990年に562万3336人だったが、減少の一途をたどっている。2005年には360万5242人、21年には300万8172人と、300万人台割れが目前となった。

ところが、通信制高校については1990年が公立・私立合わせて16万6986人だったのに対し、2000年は18万1877人、21年は21万8389人となり、20万人台を突破したのである。

ただし、「公私別で見れば、私立通信制の生徒数が大きく増加している一方で、公立通信制の生徒数は徐々に減少(資料集)とある。この約20年間で、私立の生徒数が2倍以上に増加する

一方、公立の生徒数は半減しているという。

このような変化を遂げた通信制高校だが、大学進学についても大きく変化しているようだ。資料集では、通信制高校の卒業後の状況について、「20年5月1日現在、19年度間に卒業した者のうち、大学等進学者が17・6%(公立11・7%、私立18・5%)、専修学校(専門課程)進学者が23・3%

(公立13・1%、私立24・9%)、就職者が23・1%(公立26・9%、私立22・5%)」とのデータを明らかにしている。

では、通信制高校の実相はどんなものなのだろうか。本誌では毎年6月、全国約4600高校の同約500大学への合格実績などを掲載した「大学入試全記録」を発売している。これを見てもみると、N(本校・沖縄県)、クランク記念国際、一ツ葉(本校・熊本県)の3高校は2023年度入試(23年4月入学)までの3年間で、旧七帝大(東大、京大、北海道大、東北大、名古屋大、大阪大、九州大)に一橋大、東京工業大、神戸大を加えた「難関国立10大学」や、私立大最難関の慶應義塾大と早稲田大にも合格者を輩出していた。

そこで、各校に過去3年間の前出の12大学への合格実績や、進学に関する指導



熊本県に本校がある一ツ葉高校

の現状を聞いてみた。

まずクラーク記念国際高校は「夢・挑戦・達成」をスクールモットーとしている。生徒数は1万2000人を超える。昨夏の全国高校野球選手権には北海道代表で出場し、春夏合わせて4度目の甲子園で初勝利を挙げた。野球部は北海道深川市の北海道深川キャンパスで監督と部長らと寮生活をしながら部活動や勉強

各校独自の教育スタイルを展開

前出の阿部教務進路部次長は「生徒の60〜65%は大学進学を希望しています。本校では特に英語教育に力を入れており、目的に応じて選べる留学プログラムや英語力を伸ばす独自カリキュラムを導入することで、全生徒が英検取得を目指します」と語る。

そればかりではない。文科省が掲げる「個別最適な

に励んでいる。

同校によると、3年間の12大学への合格実績は次の通りだ。
21年 北海道大1、東京工業大1、慶應大3、早稲田大7
22年 北海道大2、大阪大2、神戸大1、九州大1、慶應大1、早稲田大8
23年 東大2、北海道大3、名古屋大1、大阪大4、慶應大7、早稲田大11

学び」「協働的な学び」とリンクした独自の「21世紀型教育」を進め、生徒の習熟度に合わせ学び方をカスタマイズできる「教科指導」、教科だけでなく社会問題などについても深く探る「探究学習」などを実施しているという。
一方、一ツ葉高校は08年に開校した株式会社立の通信制高校だ。23年5月1日

現在で生徒数は1097人と通信制高校の中では小規模の部類に入るが、実績は他校に引けを取らない。同校によると次の通りだ。
21年 九州大2、早稲田大2
22年 東大2、北海道大1、東北大1、慶應大7、早稲田大4
23年 東京工業大1、九州大2、慶應大1、早稲田大3

こちらも毎年、難関大に合格を果たしている。学習指導法については、①入学時に個別カリキュラムを作成し、短期・長期の目標を組み立て、定期的に振り返り修正②議論やディスカッションで「批判的思考能力」を育成。問題解決によって小論文や面接対策につなげる③AI教材を活用した効果的な学習。デジタルツールの活用でICTスキルを育成④大学進学や職業に関する情報の提供

で、キャリアアプランニングをサポート——の4点が特徴だという。同校教頭の長澤利弘氏は語る。
「当校は対面指導を重視しています。画一的な指導に代わらずに生徒が進路を決めるためには、信頼関係を構築することが不可欠だからです。ネットを利用した授業はありますが、週1日でもサテライトスクールに登校してもらい、進路を定めていきます。また、年2回、三者面談を実施しているの

で、キャリアアプランニングをサポート——の4点が特徴だという。同校教頭の長澤利弘氏は語る。

「当校は対面指導を重視しています。画一的な指導に代わらずに生徒が進路を決めるためには、信頼関係を構築することが不可欠だからです。ネットを利用した授業はありますが、週1日でもサテライトスクールに登校してもらい、進路を定めていきます。また、年2回、三者面談を実施しているの

で、学校と家庭との連携も図っています」
さらに、職業体験学習や卒業生の談話なども取り入れ、生徒が向上心をもって自分に合った進路を定められる工夫を怠らないようにしているという。
16年に開校したN高校は、生徒数約2万人のマンモス校だ。定員を上回ったため、21年にS高校(本校・茨城県)を開学。両校を合

わせると生徒数は、実に2万7712人(23年12月末現在)に上る。
21年 東大4、京大1、北海道大1、東京工業大1、一橋大1、名古屋大1、大阪大1、神戸大1、慶應大16、早稲田大15
22年 東大1、京大1、北海道大1、東北大2、東京工業大1、一橋大1、大阪大1、九州大1、慶應大26、早稲田大40
23年 東大2、京大2、北海道大1、東北大1、東

「社会に出た時、役に立つ学び」を目指し、常に刺激的な学びがあるという。その最たるものが、学園祭だろ。角川ドワンゴ学園が運営する私立校だけあって毎年、千葉・幕張メッセで開催される「ニコニコ超会議」が会場だという。「10万人以上が参加するイ

「社会に出た時、役に立つ学び」を目指し、常に刺激的な学びがあるという。その最たるものが、学園祭だろ。角川ドワンゴ学園が運営する私立校だけあって毎年、千葉・幕張メッセで開催される「ニコニコ超会議」が会場だという。「10万人以上が参加するイ

「新しい教育を切り拓くと期待」

「社会に出た時、役に立つ学び」を目指し、常に刺激的な学びがあるという。その最たるものが、学園祭だろ。角川ドワンゴ学園が運営する私立校だけあって毎年、千葉・幕張メッセで開催される「ニコニコ超会議」が会場だという。「10万人以上が参加するイ

京工業大2、一橋大2、名古屋大3、大阪大2、神戸大3、九州大2、慶應大39、早稲田大55
しかし、同校校長の奥平博一氏はこう語る。
「決して進学校を目指しているわけではありません」
確かに大学進学希望者は33・24%と決して高くない。一方で、22年度にはマンチエスター大(英国)やメルボルン大(オーストラリア)など海外の大学に52人が合格している。

ピック閉会式で演出を担当したトラックメイカーの原口沙輔さん（21年卒）、車いすテニスプレーヤーの小田凱人さん（2年生）など錚々たる顔ぶれだ。

「与えられるものを待っているのではダメ。自らがやりたいことを本気で探す。それを応援し、実現させるサポートをするのが学校であるべき」（奥平校長）

それぞれに「学校の色」が強く打ち出されているのがお分かりいただけるのではないかと。しかし、共通していることは画一的な教育ではなく、多様性に富み、個人にフォーカスした柔軟できめ細やかな指導だ。その上に結果として大学合格実績がある。

通信制高校の現状を大学通信の井沢秀・情報調査・編集部長はこう語る。

「近年の通信制高校を見ると、明らかに生徒の質が変わってきたと感じていま

す。不登校や引きこもりの子どもたちの受け皿から、多様な生き方、考え方で通信制を選択するようになった。その中で、進学を希望する生徒はしっかり勉強して実績を残す。それぞれが自分に合った学校を選べる選択肢が増えたことはいいことだと思います」

前出の手島教授もこのように話す。

「大学合格実績が上がることは意義がありますが、教育の質を担保し、学びの多様化を維持するバランス感覚が必要です。その上で、通信制高校が持つ可能性は大きく、新しい教育のあり方をさらに切り拓いていくものだと思っています」

もちろん今回取り上げた学校以外にも、特徴的な教育や多彩な学びを提供する通信制高校がある。新たな学びの「場」はどのように広がるのか。今後もその動向には注目だ。

子供のための授業づくり

ティーチャープルーフ・カリキュラム

奈須正裕・上智大学総合人間科学部教育学科教授

ウォータープルーフで防水の意味になるから、
ティーチャープルーフ・カリキュラムとは、教師
の影響を受けることなく、安定した結果をもたら
すカリキュラムという意味合いになる。

典型は最近話題のAI(人工知能)ドリルだが、
AIドリルというのは俗称であり、正式な学術的
名称は「ITS(Intelligent Tutoring
Systems)」で、訳せば、知的学習支援システム
となる。ITSは、熟達者の知識や学習指導の要
点に関する知識をコンピュータに実装すること
により、子供が学習過程上で示す事実を手掛かり
に、その子の知識や思考の状態をコンピュータ
が推論し、個別最適な助言や出題を提供すること
で、子供の学習を支援する。

原理的には、ITSはそう新しいものではなく、
例えば、1980年代に米国の認知心理学者アン
ダーソンが開発したGPチュータ(Geometry
Proof Tutor)には、数学の熟達者が有する高度
に洗練された体系的知識と、それに基づいて実行
される優れた推論のさまざまなパターンが入力さ
れていた。そして、幾何の証明問題に対して子供
が行う推論や根拠付けのいちいちについて、その



適否と理由、さらに、その子のその時点の状態に
即したヒントや用いるべき知識などを即座に分か
りやすく提示する。子供たちはGPチュータに導
かれながら証明問題を解いていくが、その過程で
GPチュータに実装された熟達者の知識を少しず
つ、しかし、着実に学び取っていく。

興味深いことに、証明問題では常に前提から出
発し、結論へ向けて順方向で推論を進め証明する
よう教わるのが一般的なのに対し、GPチュータ
は子供に結論から前提に向けてという逆方向の推
論をも、併せて促す。これは、数学の熟達者が実
際の問題解決の際にそうしているからで、これに
より子供の証明の力は飛躍的に向上する。

このように、完成度の高いITSは、熟達者の
知識構造をモデルとした、的確な情報提供や支援
を行うので、教科内容に関する理解や洞察の浅い
教師の指導をしばしば凌駕する。

仮説実験授業

ティーチャープルーフ・カリキュラムは、もち
ろんアナログでも可能で、歴史的には仮説実験授
業の授業書がその代表格と言えます。

第28回

仮説実験授業は、理科教育の研究者板倉聖宣が
63年に創始した教育方法で、科学上の基礎的な概
念や原理・原則を、実験と討論を通して子供たち
が楽しく、そして着実に学び取ることを目指す。

板倉は、熱意のある教師なら誰でも質の高い授業
を実現できるような一切の準備立てをすることが
大切であるとし、その具体的な内容として「ゆき
とどいた授業書、テスト問題や研究問題、練習問
題、読物、実験装置、授業参考資料などの提供を
指すものであって、それぞれの教師が特別に授業
プランを作成したり、参考資料を準備しなくても
済むようにするということである」と述べている。

仮説実験授業では、これらを用い、さらに詳細
に規定された授業運営法に沿って授業を進める。

その基底には、授業には各学級の教師と子供の個
性を超えた法則性があり、個々の教師が作成した
教材や指導案で授業をするよりも、多くの学級に
おいて成功した実績を持つ、優れた授業プランで
実践した方がうまくいくとの考え方があつた。

仮説実験授業は、後にさまざまな教科へと展開
したが、そのスタートは理科授業の改善であつた。
板倉は「これまでの理科教育は、科学的認識とい
うものがいかにして成立するかについて、しばし
ばとんでもない考えちがい」をしており、自身の
「科学史と認識論の研究をもとにして、これまで
の科学教育―理科教育の内容と方法とを全面的に
組みたてなおす」ことにしたと言う。

日本では、初等教員養成を担う学部・学科の多
くが文系に位置付けられてきたこともあり、小学

校教師の中には理科を苦手とする者も少なくない。結果、板倉が嘆くような、認識論的に誤った理科授業が横行してきた可能性は否めない。

しかし、そんな教師にも子供のことを思い、良い授業をしたいという熱意はある。ならば、それを支えるべく、誰が実践しても一定の質を保障し得る教材や授業の運営手順を明示するのは、良いことではないか。仮説実験授業に限らず、ティーチャープルーフ・カリキュラムの開発者や支持者には、このような共通した考え方があ

キミ子方式

板倉がこのような考えを持つていたことは、後に「キミ子方式」を強く支持し、その普及に尽力したことから明らかであろう。

キミ子方式とは、絵画教育の研究者松本キミ子が、絵が描けない子供と接する中で、75年に考案した描画指導法である。松本は、個々の教師が特別な才能や技量を持たなくとも、一定水準の適切な描画指導ができる教育方法が存在すると考えた。理科と並んで、多くの小学校教師が専門性に不安を覚える教科が、図画工作科ではないだろうか。すると、専門性を要さずとも質の高い描画指導ができるというのは福音である。

仮説実験授業と同様、キミ子方式でも、描き方はもとより、道具や題材も詳細に規定されている。その主な特徴は、以下の四点である。

①水彩絵の具の三原色と白のみですべての色を作る。

②自然物の場合、輪郭線は描かない。人工物では描くこともある。

③描く対象に合わせて一定の手順で部分から描き始めて、隣へ隣へと描いていく。

④紙の大きさに絵を合わせないで、絵に合わせて紙を切り抜いたり、継ぎ足したりする。

さらには、準備物や道具を置く位置まで決められていた。これらが、美的創造に不可欠とされる自由や個性との関係で、疑問や批判を招く。

しかし、絵の描けない子供にとって、自由に描くという要求こそが困難や苦痛の源泉だという見方もある。ならば、まずは描き方をしっかりと教えることで、描くことの楽しさや、自分にも描けるという自信を持たせてはどうか。そうすることで、子供は次第に当初の枠組みを離れて自由に描くようになり、その子ならではの個性を發揮した美的創造の段階へと進んでいくのではないか。

さらには、仮説実験授業やキミ子方式に依拠することで、初めて質の高い理科や図工科の授業を実現できた教師たちも、その経験を通して、次第に授業づくりの本質を体得していくだろう。そしてついには、いわゆる「守破離」の筋道でもって、仮説実験授業やキミ子方式といった型を破り、型から離れて、それぞれが自分ならではの授業づくりの道へと歩みだすに違いない。そのためにも、まずはしっかりと型を学び、成功経験を得ることが大切になる。さまざま批判に対し、ティーチャープルーフ・カリキュラムの開発者や支持者たちは、こう反論してきた。

自律性と創造性

問題は、そのような動きが子供、そして教師にどれくらい生じるかであろう。まずはうまくやれないことには、その先に進めないというのは真実である。その一方で、一度うまくやれてしまうと、その方法なり型に固執、安住してしまい、ただただそれを繰り返すようになる危険性もある。

ついには、授業づくり、さらには教育全般に關しどこかに必ず良い方法や正しい手順があると考え、自分で思案するより先に、あるいは一切思案することなしに、いきなり外部に答えを求め、何も分からずに従うことになりはしないか。ティーチャープルーフ・カリキュラムの落とし穴は、まさにこの点にある。そこには、教師にとって最も大切な自律性と創造性を自ら進んで放棄させかねない強力な誘惑が、巧妙な形で組み込まれている。もちろん、ティーチャープルーフ・カリキュラムそれ自体が悪いわけではない。それとどうつき合っていくか、まさに教師の自律性と創造性の問題なのである。具体的には、ITSはどんな仕組みで子供の学びを支えるのか、なぜ、仮説実験授業はうまくいくのか、なぜ、キミ子方式だと、これまで描けなかつた子供が描けるようになるのか、これらをしっかりと問い、自分なりの理解を形成することが重要である。それが明らかとなつてくれば、守破離の道もおのずと開けてこよう。このように、ティーチャープルーフ・カリキュラムは、教師にとってまさに試金石である。

紹介、田中浩寿(滋野小)

板倉先生をのこす国研らしいしん

時の上司をのこすか?

「内外教育」7000号に寄せて

「内外教育」と私

菱村幸彦・国立教育政策研究所名誉所員

私が「内外教育」を初めて手にしたのは、文部省(当時)に入省した1959年である。以来、今日まで63年間、「内外教育」は私の必読誌となっている。

もともと、文部省在職中は、いわば教育情報発信の中心にいたせいだ。「内外教育」の価値を十分には分かっていなかった。が、91年に文部省の門を出てから「内外教育」が教育情報源としていかに貴重な存在であるかを痛感した。文部省を離れてからも、教育の仕事を通じて、教育関係の原稿を執筆してきたが、仕事に必要な情報は「内外教育」から得てきた。

私が「内外教育」に連載を始めたのは、文部省の局長職に就いた89年からである。週1回掲載の「教育法規あらかると」欄を下村哲夫筑波大学教授



(故人)と2人で月2回ずつ分担した。

その後、若井彌一上越教育大学教授(当時)、さらには坂田仰日本女子大学教授、加茂川幸夫元生

涯学習政策局長と共に、今年3月まで、毎月執筆を続けた。「内外教育」の記事の中でコピーの許諾申請が一番多いのは同欄だという。「あらかると」の記事が校内研修等でお役に立っていると聞くと執筆の励みになった。

もう一つ、私が関わったものに教育奨励賞がある。これは時事通信社が85年に創設した賞で、その選考委員として昨年まで12年間携わった。

選考方法がユニークで「授業(保育)の革新」または「地域社会に根差した教育」の分野で優れた実践を行っている学校を、各都道府県教育委員会から推薦してもらい、その学校を支社・総支局の記者が直接取材してまとめた記事に基づいて選考している。授与するのは優秀賞、優良賞、特別賞の三つの賞だが、取材の対象となったすべての学校の実践記事が「内外教育」に連載される。毎年、全国の優れた最新の教育実践例が広く読者に提供されているわけだ。

私は「内外教育」の5000号特集に「6000号のときも、私は熱心な読者であるに違いない」と書いた。それをはるかに超えた7000号になった今も「内外教育」を愛読している。

4・0%で、世話の経験がある学生は合わせて987人だった。

このうち就職への不安を示したのは「特にない」(54・9%)を除く半数近くに上った。不安に思う内容を複数回答で聞いたところ、「正社員として就職できるか不安」(13・9%)が最も多く、「通勤できる地域が限られる」(13・4%)、「休まず働けるか不安」(11・4%)、「就職先について考える時間がない」(7・8%)、「働ける時間帯が限られる」(7・0%)などとなった。

平日1日に家族の世話にかけられる時間が7時間を超えている学生は6・4%。世話が大きな負担となり、進路の選択に影響している可能性が浮かび上がった。

▽1800万人教育機会失う

【カノ(ナイジェリア)AFP時事】国連児童基金(ユニセフ)は、1850万人を超えるナイジェリアの子供が現在、教育の機会を失っていると明らかにした。昨年の1050万人から大幅に増加した。

ナイジェリア北部カノのユニセフ代表は11日、「1850万人の6割が女子だ」と記者団に訴えた。急増の背景には、北部で多発する武装集団や犯罪組織による身代金目的の誘拐がある。

2014年に北東部ボルノ州チボクでイスラム過激派ボコ・ハラムが学校を襲い200人以上の女子生徒を誘拐する事件が起きて以降、学校は誘拐の標的にされてきた。20年以降、1万1000